

# 英語絵本の読み聞かせの身体性と聞き手の理解

松本由美<sup>1)</sup>

## On the Effective English Reading Books at Elementary School

Yumi Matsumoto

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.  
*Tamagawa University Research Review*, 22, 21-28 (2016)

### Abstract

This paper proposes that the reading of English picture books by young Japanese children can have positive effects regarding the child's familiarization with the English language.

To validate this positive effect, an eighteen-month-old Japanese boy was observed for two weeks while his mother read two English picture books to him in this research. The Mother's reading to the boy was videotaped on the first day and then again two weeks later. Even on the first day, some spontaneous utterances and echoic speech sounds were produced after the mother's reading. Pointing and the flipping of flaps on the pages following his mother were also observed on the first day.

After reading to the boy for two weeks, the boy began pointing to the pictures more clearly and simultaneous utterances were more often observed. Illocutionary acts and physical behavior in response to the mother's reading increased both in quantity and in quality. The boy seemed to remember the pictures and/or the word sounds in the books and clearly pointed to the pictures and flipped the flaps as though he knew the pictures under them.

Although we haven't decided yet that English picture books. book-reading works at elementary school, the reading of picture books seems to guide young children towards the acquisition of English vocabulary and a better understanding of English stories, thus familiarizing them with the English language.

キーワード：英語絵本，読み聞かせ，身体性

**Keywords**：English picture books, book-reading, nonverbalness

### 1. はじめに：小学校英語に導入される絵本の読み聞かせ

次期学習指導要領にて5, 6年生では特別活動から教科への移行が決まり，これに伴い評価方法や基準の策定が必要になり，また文字指導が導入されることに伴う，読み書きのリテラシー教育にも備えなければならない。さらに中学校の英語科との連結も十分に検討されなけれ

ばならず，現在小学校の英語は2020年の教科化に向けて目まぐるしく動いている。この教科化に伴う様々な変革に対応するため，文部科学省も教育現場も対応に追われている。一方3, 4年生では外国語活動が必修化されることも決定されている。小学校英語は教科化されると同時に，低年齢化されるのだが，3, 4年生の方は絵本の読み聞かせの導入ということで動き始めたばかりである。

1) 玉川大学リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科

小学校中学年の外国語活動に求められているものは、平成26年9月の英語教育の在り方に関する有識者会議の提言を根拠として、「言語や文化についての体験的理解や、外国語の音声等への慣れ親しみ、コミュニケーションへの積極性を中心とする「外国語活動」(活動型)を行い、コミュニケーション能力の素地を養うこと」とあげられている<sup>[1]</sup>。これを受け、中央教育審議会教育課程企画部会の「論点整理」(平成27年8月26日)では、「中学年から、外国語学習への動機付けを高めるため、体験的に「聞く」「話す」を中心とした外国語活動を通じて、言語や文化についての体験的理解や、音声等への慣れ親しみ等を発達段階に適した形で養うとともに、指導内容・方法や活動の設定、教材の工夫、他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めることが必要である」<sup>[2]</sup>とされて、これらを実現する方策の一つとして外国語活動において英語絵本が導入されることになったのである。

文部科学省があげる絵本の読み聞かせのメリットは以下の通りである。

- ①コミュニケーションは、「話す」ことというより、相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児童にさせることが大切である。そこで、児童に聞かせる工夫の1つとして、絵本の読み聞かせが考えられる。
- ②絵本の絵から情報を読み取り、状況を理解しながら、児童は相手の話を聞くことになるため、「聞いてわかる」体験をさせやすい。
- ③また、選ぶ絵本の内容によって、現実には起こり得ないことを絵本の世界で体験することもできる。
- ④さらに、昔話の中には、生きていく知恵や教訓的なことが組み込まれている場合もある。
- ⑤このようなことを踏まえ、外国語活動でも、外国語による絵本の読み聞かせを行うことが考えられる。絵本を題材に、グループでオリジナル絵本を作ったり、物語を劇やペープサートを使って演じてみたりさせることで、絵本の内容をより理解することにつながる<sup>[3]</sup>。

(下線は原文のまま、段落変え数字の付与は本稿筆者による。)

これらがどの程度効果を上げるのかは、研究開発校で2016年4月から2017年3月までの予定で行われる授業の結果を待たなければならないが、まず①コミュニケーションの始まりである相手の話を聞くことを読み聞かせの中でさせられるのかどうか？ 次に②絵本の絵から情報を読み取り、聞いてわかる体験をしていくのか？ の二点については、語学教育においては最も重要なものであり、早急に検証することが必要であると思われる。

そこで基礎研究として、コミュニケーション力を習得していく段階の幼児に、英語絵本の読み聞かせをして、効果を検証したいと考えた。結果、絵本の読み聞かせの特質の一つである身体性が理解を促す要因の一つであることが分かったので、ここに報告するものである。

本稿の構成は次の通りである。まず次章では、絵本を定義し、さらに絵本の読み聞かせとその特質について述べる。第3章では、幼児の読み聞かせの実験の様子を報告し、第4章ではその結果を踏まえ、どのように読み聞かせるのが効果的なのかを紹介して第5章でまとめる。

## 2. コミュニケーションの観点から見た絵本

### 2.1 絵本の定義：人と人を結びつけるコミュニケーションメディア

この章では、まず表現形式としての絵本を定義してから、その形式がゆえに、読み手と聞き手の間でどのような働きをするのかを考えてみたい。

絵本は文字通り、少なくとも「絵」が存在する「本」である。文字のない絵本はあるが、絵のない絵本は表現形式として成り立たない。しかし、ただ絵があればよいというものでもなく、絵本であるためには絵と絵の間に、ある種の連続性が求められる。それは、典型的には物語性といえるが、例えば図鑑に近い知識絵本のようなものにおいては、動物や乗りものの集合としてのまとまりであったり、歴史の変化のような時間軸であったりする。いずれにせよ、絵と絵の間に、作者が意図する何らかのつながりがなければならぬ。本稿ではこのつながりを広い意味での物語と呼びたい。また、本であるためには、綴じられていなければならない。絵本は綴じられることにより、「のど」と呼ばれる綴じ目の部分や、見開きを利用した表現が可能であり、紙芝居とは異なる。ここでは「絵本は、何らかの連続性を持った絵や文字があるページが綴じられていて、めくることにより絵が移り変わり、物語を展開していく表現形式である。」と定義されるで

あろう。

一方、絵本は、その表現形式において情報を伝えるメディアとしては欠落している部分があり、それを補うべく人が関わることを希求する。まず、絵本は綴じられているので、誰かの手によってページをめくられなければ、絵本としての機能を果たすことはできない。人は直接絵本に触れることになる。また、絵本の多くは文字を包含するが、子どもが初めて絵本に遭遇する時には、その文字を大人に読んでもらわなければならない。絵本には音声は存在しないので<sup>1)</sup>必ず音声は人間が補わなければならないのである。さらに、文字無し絵本においては、絵と絵の連続性を読み手が解釈して、場合によっては文言をつけたしてもらわなければならない。また、音声は欠如していることにより、擬声語、擬態語も必要に応じて読み手が補うことが多いのも絵本の特性であろう。人は、文字や、絵から読み取れる情報や状態をインナーボイスといわれる内面の声か、あるいは読み聞かせるときの声にせよ、絵本に対して音声を付与しているのである。

絵本に対する人の関わり方については、絵本は一人の読み手を対象とすることもあるが、多くの場合は一人の読み聞かせ手と、一人以上の聞き手を対象にすることが多いだろう。そうして絵本は上記の欠落部分に人の関わりを要求しながら、次節以降のように人と人とを結びつけるメディアとして機能していくのである。その中で、絵本の身体性を、読み聞かせの原型とも言える1対1の、親子間の読み書かせから考えてみたい。

## 2.2 絵本の読み聞かせに内在する身体性

### 2.2.1 場の共有：共同注意

絵本を読んで聞かせることは、生後間もない赤ん坊に対しても有効であるとか、胎児に対しても有効であるとか、様々な説があるが、本稿で論じる読み聞かせは、聞き手が何らかの反応を示したり、読み手と聞き手の間に何らかのやり取りがあるものとする。このような絵本の読み聞かせが成立するためには、二人のどちらかが読み聞かせを行うことを要求し、双方の合意で読み聞かせが行われる絵本を共有することが必要である。さらに、絵本の読み聞かせには一般的に共同注意と呼ばれるものが成り立つことが前提だと言われている。共同注意とは、無藤(2016)によると、大人と子どもが同じものを見て、どちらもそれを了解している状態である<sup>[4]</sup>。即ち、これ

から、そこにある絵本が読み手によって読み進められ、聞き手である子どもが、まずは相手の話を聞くことが求められていることを、双方が了解している状況である。絵本の読み聞かせでは、まず見る場所、注意をする場所を共有しなければならないし、読み手と聞き手が同じものを見て、その本についての読み聞かせがなされていることを了解しあっていなければ、同じ絵本について一方が読みもう一方が聞くという、読み聞かせという行為は成立しないのである。

また、子どもは読み聞かせの中で、自分が注目しているものに大人の注意を惹きつけるようになったりする。読み聞かせだからと言っていつも読み手に主導権がある訳ではなく、実は主導権が読み手と聞き手の間を行ったり来たりしているのである。

### 2.2.2 指さし行動：命名ゲーム

また、読み聞かせという相互行為には、いくつかの身体的要素が必要とされる。一つは、指さし行動と呼ばれるものである。この指さし行動は、絵本を読み聞かせる中で、読み手にも聞き手にも現れることが知られている。無藤(2016)によると、1歳半くらいから本格的に命名ゲームと呼ばれる指さし行動が現れ、「親がゆびさして、ラベルを言う。子どもがそれを見て、似た発音をする。親が受け入れて、ラベルを繰り返す。次第に子ども側が指さして、命名をするようになる。」<sup>[5]</sup>というものである。これは絵本の読み聞かせにおいてのみ起こる訳ではないが、絵本の読み聞かせの一時期にはおおむね起こる行動で、「絵本の読み聞かせに代表される命名ゲームは初期の語彙獲得に有効である。」と無藤(2016)はさらに指摘する。3章のデータにも現れるように、指さし行動は相手の注意を喚起したい時、そのものが何なのか尋ねたい時、またそれは何なのだ命名したいときのいずれの時にも現れるので、絵本の読み聞かせには一定の期間高い頻度で観察される身体行動として知られている。絵本には絵があるので、視覚的な刺激が常に存在し、指さし行動を起こしやすい。このことは絵本に誘発されることばの気づきと、気づきから獲得に至る過程を支える重要な絵本の読み聞かせの身体性であると考えられる。

### 2.2.3 ページめくり：合意形成

絵本の読み聞かせをするときは、読み手と聞き手のどちらかが絵本のページをめくらなければ話がすすまない。ゆえに、ページをめくる側が話を進める主導権を握

るといっても差し支えないだろう。一人読みのできない子どもに読み聞かせる場合、読み手の大人がページをめくることが多いが、その絵本に慣れ親しんでくると自らページめくりをすることが観察される。大人にめくられまいと、急いでめくる行為は自分で開いて最初に見たいそのページに関して主導権を握りたいという気持ちの表れで、一人読みにつながっていくのかもしれない。3章で検証するように、繰り返し同じ絵本を読んでいるうちに、どのページを誰がめくるのかということについても住み分けが出来て、タイミングが合ってくるようだ。

また、絵本においてはページをめくるとは、場面を変えて話を進行させることに他ならない。ページをめくることが話の進行速度を決めるのである。同じ見開きを見ている、注目している場所も、見終わるのに要する時間も異なるので、通常は読み手がタイミングを計り、両者の合意形成がされたと判断した時にページをめくことになる。しかし、一般的に言われるのは、聞き手である子どもの方が絵をくまなく、細かいところまで見ているので時間がかかるということであり、読み手がページをめくった途端に、聞き手である子どもにページを戻されるというのもよく見受けられることである。また、聞き手である子どもが絵に見入って、あるいは何かを考えてページをめくろうとしない子どもよく観察される。その見開きに関して理解、あるいは了解しないうちは、聞き手である子どもはページをめくることが許容しないので、ページをめくることが聞き手の了解具合を表すことになる。

ページめくりは絵本の読み聞かせには必須の身体行動であり、絵本の最も基本的な身体性である。さらに、ページめくりは絵本の話の進行させる手段でもあるが、読み聞かせという一つの絵本に対して、二人の人間が関わる場合には、二人の人間の合意形成の手段となり得る。絵本をコミュニケーションメディアと捉えるならば、読み聞かせはコミュニケーションそのものであり、ページめくりのタイミングがうまく合わせられるかどうかは、コミュニケーションが上手くいっているかどうかの指標となり得るだろう。

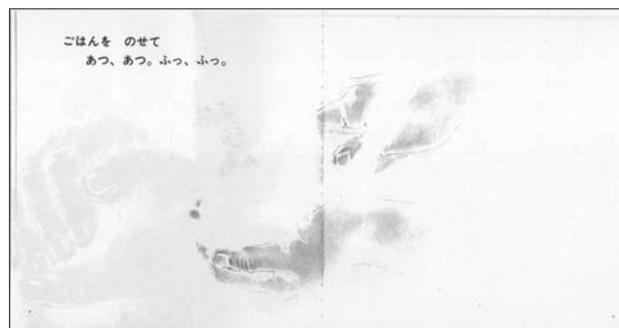
## 2.3 絵本に内在する身体性

前節では、読み聞かせ行為に伴う身体性を見てきたが、読み聞かせそのものが読むという行為や聞くという行為、またその身体感覚を伴うものであるから、身体性が

生じるのも必然であった。翻ってこの節では絵本という物に内在する身体性、すなわち行為を誘発する仕掛けや、身体感覚を呼び覚ます仕組みを見ていきたいと思う。

### 2.3.1 絵本の絵に内在する身体性

食べ物を描いた本によくみられるのは、そこに描かれた食べ物を作る仕草をすることや、描かれている食べ物を取って食べるような動作をすることを求めてくる身体性である。例えば『おにぎり』では、ご飯を炊くところから、おにぎりを作りお弁当箱に入れて差し出すまでを描いているが、あくまでおにぎりが主役であり、作り手の存在は最小限、手首から先だけが背景無しの画面に描かれている。背景が描かないことは描かれた絵だけに注目させる効果があり、おにぎりを作っていく手の動きだけが強調されている。聞き手から絵本見ると、ちょうど描かれた手首から先は絵本を持つ読み手の手先にも見え、実際におにぎりを作ってもらっているように錯覚する。おにぎりや泥団子を握った経験を持つ年齢の子どもであれば、思わず一緒におにぎりを握りたくなるはずだ。また、おにぎりを握る仕草だけではなく、「ごはんをのせて あつ、あつ。ふっ、ふっ。」というテキストや絵に描かれた湯気から、ご飯をのせた時の温度を掌に感じることができる、感覚を呼び覚ます身体性を持つ。



『おにぎり』第3見開き



『おにぎり』第6見開き

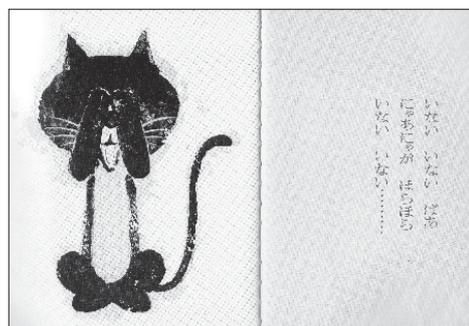
### 2.3.2 絵本の形状に内在する身体性

しかけ絵本とよばれる、形状に工夫を凝らし、動作や仕草だけでなく遊びを要求してくる絵本もある。おもちゃとしての要素を持つ、しかけ絵本は遊びとしての身体的な関わりを要求する意味で、身体性を内在すると言えよう。例えば『はらぺこあおむし』のように、ページに穴をあけた穴あき絵本、また、赤ちゃん絵本によくみられるようなフラップ（めくり部分）付絵本は、その形状から読み手と聞き手が、その絵本に触って遊ぶことを前提として作られていることがわかる。『はらぺこあおむし』では、あおむしが果物を食べながら通り抜けていく様子が、穴に指を入れることで体感できる。子どもは穴に指を入れることが好きであるし、虫食う様子が身体感覚を通じて理解されるであろう。

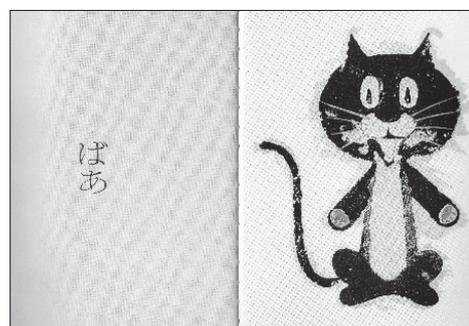
フラップ付の絵本におけるフラップをめくる行為は、めくり行動と指さし行動の間にあるように感じる。即ち、めくりでありながら、ページめくりとは異なり話の進行速度を決定するものではなく、また読み手と聞き手の合意形成を表すものでもない。一方指さし行動とは異なり、フラップをめくると、その部分に新しい絵が現れる。フラップの下に回答が現れるといっても良いだろう。聞き手である子どもは予測を楽しみ、確認できることに安心と喜びを覚えるが、それを独力で成し遂げることができる。フラップ部分はページサイズよりも必然的に小さいのであるが、このことも子どもにとっては重要である。容易にめくることができ、子どもはめくるという動作を楽しむこともできるし、めくる動作の練習にもなる<sup>2)</sup>。また、指さし行動が語彙獲得に有効であるのは、無藤（2016）が紹介しているが、このフラップめくり行動も語彙獲得に有効なのではないかと思われる。次章で紹介する18カ月児が、フラップをめくると同時に、フラップの下に書かれている語彙、つまり母親がめくると同時に発音する語彙を同様に発音している様子が観察された。語彙獲得には視覚情報である絵も有効であろうが、さらに身体感覚が加わるとさらに記憶しやすいのではないかと思われる。

また、絵本ならではのページめくり遊びの要素を絡めた絵本もある。めくるという動作が既に絵本の形状が希求する身体性であるが、さらにそこに別の動作を重ねている。『いないいないばあ』は絵本のページめくりをうまく利用した傑作のひとつであろう。絵とともにめくりの中に身体性を内在する。絵本をめくる動作と顔を覆った両手を開く動作が見事に一致するのである。思わ

ず読み手も聞き手も「いないいないばあ」をしてしまうことだろう。



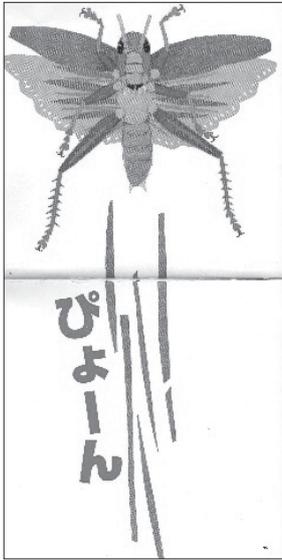
『いないいないばあ』第1見開き



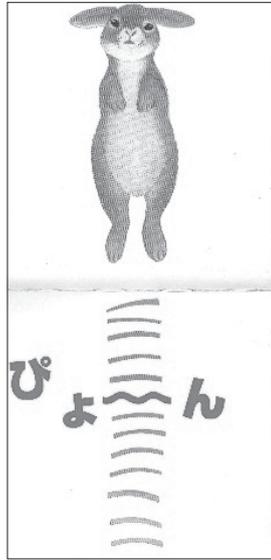
『いないいないばあ』第2見開き

### 2.3.3 絵本のテキストに内在する身体性

最後に絵本のテキストに内在する身体性を考察しておきたい。絵本では文字も画像の一部なので、本稿ではテキストも言語情報であると同時に視覚情報の一部と解釈する。従ってテキストだけ分離させることは難しいのだが、まず、特に漢字、ひらがな、カタカナの三つの書記方を持ち、縦書き横書きの双方を自在に使える日本語の特性を生かすことによって、テキストに身体性を持たせている例を紹介する。次々と登場する生き物の飛び跳ねる様子を、画面を縦長の見開きに使うことで生き生きと表現していて、画像が身体性を持つ作品である。ここではタイトルにもなっている「びよーん」というオノマトペを繰り返しながら、書記方を変えることにより、生き物ごとの跳び方を分けて表現しているところが秀逸である。



『ぴょーん』第6見開き



『ぴょーん』第8見開き

ところでオノマトベもテキストで身体性を誘発するものとして、良く知られているので、ここで深く論じることはしないが、身体性という観点から簡単に触れておきたい。まず身の回りにある音や様子をどのような言語音に置き換えるかはその言語に固有である。例えばバッタの跳ぶ様を「ぴょーん」と表現するのは日本語だけかもしれないが、読者はこうしたオノマトベを、ほぼ書物を読むことによって実際の音とマッチングしていくことになる。逆に読者の中でいったんマッチングされてしまえば、オノマトベを聞いたり、読んだりすることにより実際の動きや音、温度感覚などを想起させることができるだろう。オノマトベはその言語そのものに身体性を内包していると言っていいだろう。

### 3. 検証：絵本の身体性と18カ月児の絵本理解

これまで見てきた絵本の身体性が、読み聞かせの場面においてどのように有効なのか、18カ月の日本人男児とその母親による読み聞かせを記録して検証した。この実験は小学校3、4年生に導入される英語の絵本読み聞かせの基礎研究でもあるので、文部科学省が絵本の読み聞かせの導入を決めた根拠にもなっている「絵本の絵から情報を読み取り、状況を理解しながら、児童は相手の話を聞くことになるため、「聞いてわかる」体験をさせやすい。」<sup>[6]</sup>状況を再現するため、やはり書くこと読むことではなく、周囲の発話を聞くことによりことばを獲得していく幼児に、英語絵本の読み聞かせをして記録観

察した。

#### 3.1 身体性とともに進む理解

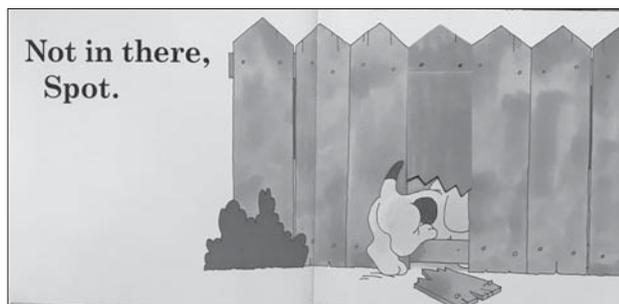
ここで紹介する実験参加者は日本人男児（18カ月）と母親。男児には英語学習の経験はなく、母親にも大学卒業後は英語を学習した経験はない。絵本は4冊選定したうち“Is This My Nose?”を必須とし、もう一冊は母親が好きな絵本を“Spot Can Count”, “Spot’s First Walk”, “Spot Goes to the Farm”の3冊から選んでもらった。後者3冊は、いずれの絵本もフラップのついためぐり遊びのできる絵本になっている。

“Is This My Nose?”は、各見開き左側に登場する動物に‘Can you find your eyes?’と尋ねられた子どもが、同じ見開き右ページで尋ねられた顔の部位を指さしている絵に‘Yes, you can.’のテキストが添えられ、次々と顔の部位を見つけ、最終頁に貼りつけられた鏡で自分に出会うという絵本である。この絵本を選定した理由は、幼児が最も興味を持つと思われる顔を題材にしていること、また母親が自分の顔の部位を指さすか、子どもの顔を触るといった、何らかのジェスチャーをしやすいだろうと予測したからである。その他は特に声色の変化や、テキスト（セリフ）の付け加えはせずに、自然に読んでもらうよう依頼した。残り三冊はいずれも、Spotという子犬が主人公のフラップ付絵本。こちらを選定した理由は、主人公に親しみやすいだろうというだけのことであり、実験を開始するときは絵本の読み聞かせの身体性を意識したものではなかった。しかし、記録を観察していくうちに語彙の獲得が、絵本の身体性と多いにかかわりがあるのではないかと感じられた。

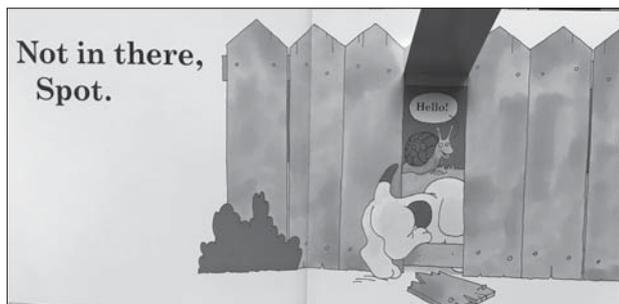
まず手渡した一日目に2冊をまず二回ずつ読んでもらい、母子の様子をビデオで記録した。さらに、絵本をそのまま家に持ち帰り、一週間に3回以上（気に入った場合それ以上も可とした）読んでもらい、二週間後にまた、同じ絵本を読み聞かせるところを、ビデオで記録した。

英語絵本を読み聞かせた場合にも第一回目からことばの気づきが見られた。例えば“Spot’s First Walk”については、フラップがある最初のページである第2見開きでは、とても良く反応している。一回目には母がフラップをめくり、中に書かれている‘Hello!’という文を読むと、最初男児は絵を見て母親の音声を真似て繰り返し、‘Hello!’と発話した。同日に続けて読んでもらった二回目の読みでは、母親がフラップをめくって発話すると

きには何もせず、次のページに進もうとする母親の手を押し戻してから、自分の手でフラップをめくり、‘Hello!’と発話してから閉じるという動作を三回繰り返している。さらに、2週間後では、第1見開きから読もうとする母親の手をよけて、最初のフラップがある第2見開きのページそのものを男児が自分でめくり、さらにフラップも自らめくって‘Hello!’と発話している。こうした変化だけでは、英語の語彙を獲得していると言っていることはできないが、男児の読みが変化し音声を獲得していることは明らかである。2週間後も、フラップのあるページの反応は変化しているが、フラップの無いページ第1見開きと、第11見開き（最終見開き）については、あまり反応が無く、寧ろスキップしようとする態度が観察された。



“Spot’s First Walk”  
第2見開き フラップ閉じたまま



“Spot’s First Walk”  
第2見開き フラップを開いた状態

### 3.2 場の共有とともに進む理解

2週間後もう一度同じ親子の読みを記録観察したところ、言語だけではない変化が親子ともに見られた。もちろん母親は英語自体に慣れを見せたが、ページめくり行

動のところで述べた、ページめくりを通じた母親と男児のコミュニケーションが感じられたのである。まず次の第3見開きではフラップがドアの形になっているが、ここでは男児がドアを「コンコン」と発話しながらノックをしてからドア型のフラップを開ける。これを3回繰り返していた。次の第4見開きではフラップを男児がめくり、フラップの中に書かれたテキスト‘Have a nice day!’を母親が発話すると、男児は音声を真似るのではなく、母親の顔を見上げて、親子は顔を見合わせて微笑み合った。ここでは絵本の読み聞かせとしてのコミュニケーションではなく、実際の挨拶として‘Have a nice day!’がその役割を果たしているように思われる。第6見開きでも同様の現象が見られた。フラップを男児がめくり、フラップの中に書かれたテキスト‘Thank you!’を母親が発話すると、やはり母親に抱かれた男児は、音声を真似るのではなく、体をよじって母親の顔を見上げ、二人は笑顔を交わしたのである。ただの音声の繰り返しではなく、この絵本の一部であるが挨拶であることが理解され、音声模倣ではなくコミュニケーションとして理解されていると思われる。さらに検証を進めなければならないが、2週間でも読み聞かせによりことばの気づきからコミュニケーションへと変化すること、そうした変化を起こすには、このフラップ付絵本のように身体性を持った絵本が有効なのではないかと考えられる。今後さらに検証を進めたい。

### 4. 今後の展望：身体性を利用した集団への読み聞かせ

さて、今後の展望として身体性を活かした読みを小学校英語教育の小学校3、4年生の英語絵本の読み聞かせに取り入れていきたい。文部科学省では英語絵本の読み聞かせ方は次のとおりである：

- ・指導者は、ジェスチャーをつけ、表情豊かに読む。これらも児童にとっては、物語の筋などを理解するための大切な情報源となる。
- ・単に絵本に載っている文言をそのまま読むのではなく、児童に絵本の絵や筋について時折質問をしながら、児童を絵本の世界に引き込むようにする。
- ・ページをめくる際には、次に何が起こると思うかなど発問し、児童に次の話の展開に興味をも

たせる。そうすることで、次はどうなるだろうと児童はより興味をもって、指導者の読み聞かせを聞くとと思われる。

〔Hi, friends! 2 指導編〕(文部科学省作成, 平成24年度配布)より抜粋<sup>[7]</sup>

下線は本稿筆者による

このうち、ジェスチャーをつけて読む部分はまさに、絵本の身体性を応用して行うべきだと考えるが、ジェスチャーをどのようにつけるのかについては述べられていないので、身体性を意識して学生実習を通じて小学校3年生に実践してみたので、簡単に紹介したい。

まず、身体性といっても、1対1の時と異なり、集団に伝えるためには工夫が必要である。声や表情、動作を大きくしなければならないこと、また遠くの児童からでも何をしなければならないのかわかりやすいように、まず授業者がやってみて繰り返させること、そのときに表情豊かに身体反応も強調することも大切である。読み聞かせるといふよりは、演じると考えた方が良好だろう。従ってテキストも全て暗記して行う。

この実習では、食育の授業の一環としてハンバーグを作り、最後に主食副食のバランスを整えて食卓に出して食べるまでを英語で紹介している。料理用語は難しく感じられるかもしれないので全員でハンバーグを作るところから食卓を整えるところまでをジェスチャーで共有し、食育の目標としていたものは達成されたようだ。特にひき肉をまとめてハンバーグステーキの成型をするところ、焼きあがったハンバーグステーキにケチャップを絞り出して添えるところは特に触感を重視して動作にも工夫した。

前章で親子の間に出来上がったような、コミュニケーションが集団での読み聞かせにもできるようにするにはさらなる工夫が必要かと思うが、より良い読み聞かせ方を探っていきたい。

## 5. 終わりに

今後、さらに絵本の読み聞かせの身体性について考察を深め、コミュニケーション力の向上により直結した絵本の読み聞かせ方を実践し、さらに小学生だけではなく、

日本の青少年の読書率向上にもつながる乳幼児への読み聞かせに反映していきたい。

## 謝 辞

本稿で紹介する18カ月児と母親の読み聞かせ実験につきましては、玉川大学リベラルアーツ学部教授梶川祥世先生の監修のもとで行ったものです。監修をしてくださいましたこと、データの掲載をご許可いただいたことに心より感謝申し上げます。

## 註

- 1) 絵本の世界もバリアフリー化が進み、視覚障害者も楽しめるような音の出る絵本、また玩具として音の出るものが存在するが、本稿では考察対象としていない。
- 2) めくることは絵本にとっても必須の動作であるが、絵の無い本を読む読書にとっても必須であるから、読み聞かせによってこの動作を身につけることは、その後の読書傾向に良い影響を及ぼすとされている。

## 紹介絵本

- 『おにぎり』平山英三 文・平山和子 絵 福音館書店 1992年  
 『はらぺこあおむし』エリック・カール 作 偕成社 2010年  
 『いないいないばあ』松谷みよ子 文・瀬川康男 絵 童心社 1967年  
 『ぴょーん』まつおかたつひで 作 ポプラ社 2000年  
 “Spot’s First Walk” Eric Hill, Penguin. 1981

## 参考文献

- [1] 英語教育の在り方に関する有識者会議『今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言(報告)』2014年9月26日
- [2] 文部科学省『教育課程企画特別部会 論点整理』2015年8月26日  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf)  
 最終アクセス日 2016年10月1日
- [3] 文部科学省『Hi, friends! 2 指導編』2012年
- [4] 無藤隆『乳幼児に読み聞かせるものとしての絵本とは何か?』絵本学会講演会配布資料 2016年
- [5] 同上
- [6] 文部科学省『Hi, friends! 2 指導編』2012年
- [7] 同上